



札幌西支部

小島 史資

Fumitaka Kojima

私は東京の大学に進学をしましたが、進学目的である資格試験のことはすっかり忘れた4年間を過ごしました。英語の勉強と異文化に触れる機会が多かった学生時代を振り返ります。

1年次の2名の英語の先生方とは20年以上に渡り年賀状のやり取りが続いています。その先生方には大きな影響を受けました。特に思い出深いのは大学1年の夏休みに参加した国連グローバルセミナーです。青山の国連大学にて3日間缶詰め状態で行う学生会議でしたが、先生方の推薦もあり、非常に有意義かつ密度の濃い時間を過ごすことができました。この時国際問題を疑似的に議論し、それ以来外交官の世界に憧れることとなります。外務省のインターンに参加したことも、地方では経験のできない貴重な機会でした。

これ以降は夏休みや春休みがある都度、日本を離れる機会を自ら作り異文化に触れるよう心がけました。ニュージーランドへの1か月間の語学研修参加や欧州4か国を1人でバックパックで回る鉄道旅は20歳前の自分にとって大きな出来事で、そこで知り合った多くの外国人達とのコミュニケーションは今でも忘れられません。言葉を超えてまずは気持ちを近づけることが大事だと学びましたし、「イエローモンキー」や「エコノミックアニマル」と称され、生まれて初めて差別を感じた経験もこのときでした。

また、大学1年次の春休みの1ヵ月間は大学からの派遣で米国のスタンフォード大学に文化交流のため滞在する機会がありました。この大学の学生は「よく学びよく遊ぶ」を実践しており、日本のように「勉強だけ、もしくは遊びだけ」というような偏った学生生活とは大きく違う、充実した生活を送っていることに衝撃を受けました。学生寮の生活も楽しく、いわゆるキャンパスライフを満喫した1ヵ月でした。

日本に帰国後は友人たちと遊びながら、学業も手を抜かず、残りの3年間は学費免除を受けられるまで頑張りました。一方で、休みの間に海外に向かうため、学期中はアルバイトにも精を出し、自分なりに学生生活をコントロールしていました。

3年次の夏休みには国際協力の現場を体験するために、ケニアの難民キャンプを視察するNGO主催の学生プログラムに参加しました。この1ヵ月は国連のベースキャンプに滞在しながら、図書館建設や食料配給の現場を訪ねましたが、非常にタフな毎日で、正直なところ、「興味本位だけで訪れてはいけない場所もある」と痛感した日々でした。理系出身の学生であればある程度即戦力になりうるが、文系に属していた自分は無力を痛感する日々で、まさに「手に職を付ける」ことの大切さを感じました。医師に憧れを抱いた時期もこの頃です。

4年次には米国のミシガン州にあるウェスタンミシガン大学の経済学部で9ヵ月間、交換留学生として学びました。この留学の日々が自分の大学時代のハイライトだったと今でも思います。学生寮で過ごした日々は密度の濃いもので、同じ寮の友人達と朝まで話し込んだことは忘れられません。キャンパス内に寮があるため、数時間寝てから、またすぐ授業に向かうという日々でした。課題も多く、学期の試験の時は図書館に泊まり込みをしたこともありました。

今は縁あって職業会計人として活動していますが、札幌で外国人向けの税務相談などを年に数回行っています。「手に職を付ける」ことの大切さを痛感したあの学生時代から20年。修行はまだ続きますが、これからも自分なりにできることを探求していきたいと考えています。



ウェスタンミシガン大学学生寮前にて(2000年4月)